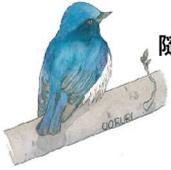


洪浩然に連なる会と大学の国際化



随 筆

辻 毅 一 郎*

Ko Kozen descendants and Internationalization

Key Words : Edo-era, Kaitokudo, Tekijuku, Internationalization, Globalization

山清への旅

洪浩然（こうこうぜん）は筆者の母の実家の始祖とされる人物である。母の父（筆者の祖父）の洪純一は第11代、その長男（筆者の叔父）の洪悦郎（よしろう）は第12代の当主にあたる。浩然是、豊臣秀吉が朝鮮へ侵入した1594年、韓国の晋州市から十数キロ北にある山清という村落の近くの山中で鍋島直成の軍に捕えられた。そのとき浩然是12歳の少年だったが、大きな筆を持っていたので直成がその技量を認め、家来に命じて佐賀へ連れて帰らせたらしい。その見込み通り、浩然是直成の息子勝茂の相手を務めながら佐賀藩に仕え、書家として大成し数々の書を残した。主君勝茂が参勤交代で江戸勤め中に死去したとき、佐賀城下の阿弥陀寺で追い腹を切り76歳の生涯を終えた。その墓は洪家にまつわる人々によって守られ現存している。

切腹にあたって、「忍 忍則心之宝（しのぶはすなわちこころのたから）不忍身之殃（しのばざるはみのわざわい）」との揮毫を家訓として遺した。朝鮮から連行され望郷の念は強く、70歳のころ勝茂から帰国の許しを得たのだが結局は関所で呼び戻され、故郷の地を踏みたいという願いは終にかなわなかった。異国の地へ来てその慣習に従い、恭順の意を明らかにして洪家の存続を願ったのだと言われている。筆者が洪家について詳しく知りたいと思うよ

うになったのはごく最近で、きっかけは表題の“洪浩然に連なる会”が発足したことにある。会員は浩然の子孫・縁者で、平成24年5月に第1回目の会合が開かれ30名ほどが集まり、その後毎年総会を開いている。主な目的は阿弥陀寺の墓の維持であるが、洪家を通して歴史を勉強するとともに、いままでばらばらだった子孫間の親睦を図ることも目的の一つである。

叔父は数年前に亡くなったが、二人の子はともに女子で他家へ嫁いだため、洪家はここで途切れることになった。そのため叔父は生前、代々受け継いできた屏風、書などの遺品を佐賀県立名護屋城博物館に寄贈した。同博物館が以前から浩然の書等を所蔵し、調査や企画展示等を行っていたためである。そうした中で、同博物館と交流のある韓国晋州博物館の調査により、浩然の兄弟の子孫が現在も山清で暮らしていることが明らかになった。兄弟は4人で、浩然是直成軍に捕えられたが、他の兄弟のうち少なくとも二人は逃げ、子孫を残していた。そして、そこには南陽洪氏茂朱府使公花樹会と称する親族の集まりが存在していた。

連なる会の活動の一つはこの南陽洪氏との交流である。まずは日本側が晋州博物館と山清を訪問、翌年韓国側が来日して名護屋城博物館を訪問、そして平成26年4月には筆者も含め連なる会の会員十数人が韓国を訪問した。先方は20数人がバスを仕立てて釜山空港まで出迎え、我々一行は大変な歓迎を受けた。旅のハイライトは、南陽洪氏が山清に新たに建設した浩然の記念碑の除幕式に参列することであった。この碑には筆を持った浩然の絵と、くだんの揮毫とが彫られている（写真1）。南陽洪氏から見ると、先祖が連行されて420年、ようやく里帰りを果たした、ということになるのである。韓国では浩然是主人公とした物語が本になりビデオも制作さ



* Kiichiro TSUJI

1943年9月生
ケース・ウェスターン・リザーブ大学大学院システム工学専攻博士課程修了
(1973年)
現在、大阪大学名誉教授 Ph.D
システム工学
TEL : 0797-74-5054
FAX : 0797-74-5054
E-mail : tsuji@pwr.eng.osaka-u.ac.jp

れていて、除幕式には政治家の姿も見られメディアの取材もあった。その後南陽洪氏代々の墓へお参りした(写真2、3)。お墓自体は最近別の場所から移してきたそうで、山の斜面一帯を占めるという感じの、我々から見ると巨大で立派なものだった。



写真1 洪浩然記念碑(韓国、山清)



写真2 移設された南陽洪家歴代の墓



写真3 墓の石像と筆者夫婦

このように同じ家系の子孫が国を超えて交流することは大変珍しいと聞いた。筆者も浩然が捕えられたという洞窟の近くまで行ったが、辺りは険しく山深いところで身を隠すのは簡単そうに思えた。しかし、朝鮮侵攻に関する書物によれば、直成軍は山に

逃げ隠れた人々がしばしば組織化され反旗を翻したことに恐れをなし、犬などを使い大規模に搜索したらしい。考えてみれば鍋島焼、有田焼、伊万里焼などの技術を伝えたのは同じ時期に連行された人たちで、これらの技術者や知識人は数万人にも及ぶとされている。案内してくれた現地のバスガイドからは、田畑を荒らされたうえに有為な人材を多数失った朝鮮本土はその後長期間にわたって荒廃した、と聞かされ、改めて歴史を再認識することの意義を実感する機会になったのである。すぐ隣の国ながら言葉の壁があり、その昔日本語を習ったことのあるお年寄り以外とはほとんど話ができず、残念だった。しかし、こうした草の根的交流は、両国間の相互理解の向上に重要な役割を果たすものと思ひ、今後も続けていけたらよいと考えている。

懐徳堂と適塾

系図によれば、洪家はどの世代でも男子がいて家督を継いできたわけではなく、第6代の洪安常には子がなかったため、その妹の娘に養子を迎えて洪家を継がせた。養子は古賀晋城といい、浩然を顕彰し「洪浩然伝」を著した佐賀出身の儒者古賀精里(せいり)の次男である。晋城は洪安胤(やすたね)と名乗り第7代の洪家当主となった。その父精里は若いころ京都で勉強し、その後佐賀藩の藩校である弘道館の設立に加わり教授となった。そして、晩年には江戸幕府が開いた昌平坂学問所(昌平黌)に招聘され、江戸に居を移して教授を務めた。また、大坂の学問所である懐徳堂の第三代学主であった中井竹山と親交があったことが、懐徳堂のホームページ等に記されている。懐徳堂は1724年、五同志と称される大坂の豪商たちが出資し設立されたが、後に幕府公認(官許)となった。「寛政の改革」が行われた時期であり、古賀精里も中井竹山と同じ朱子学の主唱者で、その改革に関わっていたようだ。その長男(安胤の兄)は穀堂(こくどう)、三男(安胤の弟)は侗庵(とうあん)、さらに侗庵の長男(安胤の甥)は謹一郎といって、この三人はすべて儒者となり、穀堂は弘道館の教授、侗庵と謹一郎はともに昌平黌の教授を務めた。

加えて古賀謹一郎は、適塾を創設した緒方洪庵の墓碑銘を撰していることも分かった。洪庵は周知の通り、幕府から何度も招請された末、1862年に西

洋医学所の頭取に就任した。その翌年江戸で急逝したから、その墓は大阪にもあるが、埋葬されたのは江戸で、現在は文京区高林寺に墓がある。なぜ、江戸に生まれ育ち長年住んでいた謹一郎が緒方洪庵の墓碑銘を撰したのであろうか。

謹一郎は1816年生まれで1884年に没しているから、江戸幕府から明治政府へと大変革があった時代を生きた。儒者であり幕府の役人でもあって、幕末には米国のペリーやロシアのプチャーチンらとの開国交渉に深く携わっていた。明治政府が発足した後は、儒者らしく「二君に仕えず」ということで、貴族になる機会もあったろうに、公職をすべて退き市井の老人として一生を終えた。そのため一般にはほとんど知られていない。九州大学名誉教授の小野寺龍太氏は、このように幕末から明治維新にかけて活躍した、いわば無名の人々に光を当てたいという趣旨で様々な人物を調べておられるが、謹一郎については伝記を著している（小野寺龍太著：古賀謹一郎、ミネルバ書房、2006年）。

伝記によれば、謹一郎は幕末に老中阿部正弘のもとで洋学所（安政の地震で焼失後名称を変え蕃書調所となった）の設置に奔走し、1855年その頭取に任命された。蕃書調所は東京大学の源流の一つと考えられている。オランダ語以外の外来語による書物も翻訳し、科学についてもエレキテルなどを含め広範囲の分野を研究・教育の対象としていた。直接会ったことはなかったようだが、洋学所への人材を全国的に探す中で洪庵のことは良く承知していた。洪庵の次男緒方惟準（これよし）に頼まれ、1867年に墓碑銘を撰した。その銘文には「その門下から優れた者が多く出たことから、洪庵の功績は大きい、敢えて洋学所の教官には推薦しなかった。むしろ大坂で適塾を発展させ「西学の郷校」を幕府の支援で創設し、それを主宰してもらうのが良いと思っていた。ただ自分はすぐに職を去ることになってしまったので、そのことは成就できなかった」という趣旨のことが書かれているとのことである。謹一郎は1862年に同頭取を免職されている。

懐徳堂と適塾は周知のとおり、ともに大阪大学がその源流としている教育機関で、筆者が国際交流を担当していた折には、外国からの訪問客に対して、大学の歴史を説明する際必ず紹介していたものである。それは、国際交流においては自らの歴史を語る

ことが大変重要であるためで、とくに東アジアの人たちは懐徳堂の設立年を大阪大学のそれとすることにむしろ賛同するのだった。筆者の先祖・縁者がいくばくかでも関与していたと知っていたら説明にもっと熱が入ったかもしれない。

開国と大学の国際化

伝記を読んで、幕府が開国へ向けて尽力する中で謹一郎の様々な感想に触れていると、おこがましいことかもしれないが、筆者が大学の国際化に携わり始めてこのかた感じたことが次々と蘇ってくる。前者は国のレベル、後者は大学のレベルの話であり、時代背景も異なるので比べようがないともいえるが、筆者としては謹一郎の受け止め方に共感する部分も多い。

謹一郎は日露交渉と日米交渉の両方に関わっていたが、プチャーチンや日米和親条約の批准に下田へ来たアメリカ使節アダムスが一人で決断できるのに、幕府の使節は3～5人で交渉に臨み、別室で相談するばかりで決断ができない状況を嘆いている。筆者は以前EU教育部を訪れ、EUが計画・実施中の交換留学プログラムを調査したことがある。その中には修士2年間のうち1セメスターだけ海外で過ごすといった大変魅力的なものもあった。しかし、当時日本は“小出し”の参加にとどまり積極的ではなかった。「お役人は持ち帰って検討するというだけで進展がなく、もう時間的に間に合わない」と先方は嘆いていた。もちろん予算を伴うものであるので、その場で結論を出すのは難しかっただろう。しかし、より積極的な交渉の仕方があるのではないかと我々はお役所の優柔不断を情けなく思ったものだ。

大学のグローバル化が叫ばれて久しい。企業のグローバル化は進行しており、言うまでもなく外国との交流は盛んである。それにもかかわらず、大学は外国から見るといまだに鎖国しているかのように映ると、とくに企業人から批判されてきた。2005年に発表した「大阪大学の国際交流戦略」において、大阪大学は「世界に開かれた魅力ある大学」を目指すことを国際交流の目標と定めたが、とくに異論はなかった。つまりその当時、大学は鎖国していないにしても世界に開かれた状態ではない、ましてやグローバル化はされていない、と自認していたことになる。まずは大学のプレゼンスを上げようと、海外

拠点の設置に乗り出し多くの教職員の方々の尽力で世界主要地域に拠点が設けられたが、このところ活動が停滞ぎみなのが気にかかっている。経済的理由を挙げているようだが問題はむしろ重点の置きどころであろう。また、文科省のいわゆるグローバル30への応募に際し、英語で授業をするコースが学部レベルで作られることになったが、これは結構難しいことであった。あたかも日本文化が崩壊してしまうように言ったり、日本人に対する教育が疎かになるというもっともらしい理由をつけたりして、ほとんど自明なグローバル化の現実から距離を置こうとする人が結構多かった。全国的にみても大学の世界ではこの傾向が強いのかも知れない。2年ほど前に日本経済新聞が「大学開国」という特集を組んだことを思い出す。伝記によれば謹一郎は「鎖国の習いが人々の心中深く沁みこんで自由闊達の気象がないのは現在のわが国民の悪癖」と記している。尊王攘夷の活動が活発化するより前の話である。

伝記によると謹一郎は洋学所に登用すべき人材の要件について、「世間、蠻学など好み候者は、いづ

れ常態の人には少なく、所謂異人と申すような者にこれあるべく哉。その異人を多く集め申さず候ではこの学開け難く候」のように考えていたらしい。百数十年を経た今でもその通りと頷くのは筆者だけではないだろう。筆者は仕事を通して大学の国際化の志を同じくする多くの教職員に出会った。これらの方々は多少個性が強かったかもしれないが、考え方は極めて合理的で、アイデアの豊かさ、実行力、人間力は並外れて素晴らしかった。これらの方々が大学の国際化をけん引し、英語コースの具現化にも貢献した。そして大学にはこのような人たちが大勢いると信じている。

山清への旅に参加したことで、改めて先祖の足跡に触れ、今までとは別の視点から自身のここ十数年の国際交流、国際化へのかかわりに思いを巡らせた半年であった。最後にこの記事の後半は古賀謹一郎の伝記に負うところが大きい。著者に謝意を表すると同時に、本記事中の感想や解釈は筆者の責任において記したものであることをお断りしておく。

